

地域研究と映画

——総特集「混成アジア映画の海

時代と世界を映す鏡」に寄せて

鈴木 茂

はじめに

地域研究者として、これまで専門のブラジルについては映画の紹介や批評を行ったことはあっても、アジア映画はまったくの門外漢で、とうてい作品や制作者に関する論評をする力はない。この文章は、本特集の問題提起を受けて、地域研究の立場から研究および教育の素材として映画がもつ可能性と課題を考えた覚え書きであることを、予めお断りしておきたい。

I 地域研究と映画——個人的体験

一九八一年七月、私が初めてブラジル訪れた頃は、軍事政権の経済成長戦略が行き詰まり、いわゆる「失われた一〇年」が始まろうとしていた。留学先の大学でも、やがて教職員が長期のストライキに入り、いつ終るとも分からない休講が続いた。仕方なく、よく郊外のキャンパスからバスに揺られてサンパウロの中心部に出かけ、街を徘徊したものだった。そのときに見つけ、いまだにサンパウロを訪れるたびに立ち寄る場所が、古書店と映画館である。

現在のブラジルでは、サンパウロやりオといった大都市

に限らず、ある程度の都市ならどこにでも大規模なショウピングモールが建ち並び、その中にはシネマコンプレックスがあつて観客を集めている。しかし、当時はまだサンパウロにせよリオにせよ、旧市街に一〇〇〇席を超える巨大な劇場が残っており、映画が大衆娯楽の華であつた一九五〇年代、六〇年代の賑わいを忍ばせていた。平日の昼間、だだっ広いガラガラ劇場で観た、今は題名すら覚えていないボルノ映画に登場する日系人やアフリカ系人の女優たちの姿は、あまり「愉しい」ものではなかったが、ブラジル社会における人種・エスニシティとセクシャリティーの見えざる関係を示唆してそれなりに興味深かつた。

カルロス・ディエゲス監督の『バイバイ・ブラジル』（一九七九年）、レオン・イルズマン監督の『ブラック・タイ』（一九八一年）、それにアルゼンチン出身のエクトール・バベンコ監督の『ビショット』（一九八〇年）は、一〇〇席にも満たないような映画館で何度も観た。フィクションと現実を混同するほどナイーブではなかったとしても、これらの作品に何らかの「リアリティー」を感じとり、映画、とりわけ劇映画が地域研究にとって重要な資料となりうるように、何となく感じたのであつた。

II 地域研究の資料としての映画

最初の長期滞在以来、ブラジルを訪れるたびにお気に入りの映画館の近くに宿をとり、可能なかぎり多くの映画を観るように努めてきた。一九八〇年代後半ビデオテープが発売されるようになると新作を購入できるようになった。やがて中古ビデオも出回るようになり、現在ではDVDと成つて日本へ持ち帰るのも楽になった。しかしながら、大学の授業で使用したり、映画祭のパンフレットなどの原稿執筆に役立てたりするほかは、これまで自分の研究に生かされていないのが偽らざる事実である。『地域研究』のこの「総特集」を読み、まず目に留まつたのは、「映画は内在的な視点から社会を理解する上で重要な資料となりうるため、地域研究においてもますます重要性が増していると思われるが、調査地で積極的に映画を観たり映画資料を収集したりして、さらにそれを研究成果として発表する地域研究者はまだ多くない」（二二頁）という、巻頭の「総特集にあたって」で見つけた山本博之氏の指摘であつた。私を含め、言われてみればその通りである。

山本氏は、地域研究者のこうした映画を資料とすることへの消極的な態度の原因として、「学術研究を行う身であ

りながら映画を愉しんでいることに対する『後ろめたさ』を示唆されているが、私にはむしろ方法論的な困難さのほうが大いように思われる。この点について、制作者、批評家（地域研究者）、観客の関係について考えてみたい。

山本氏は、映画を地域研究の素材として使い、かつ地域研究の観点から映画を愉しむ工夫と方法として、映画批評の表層主義（表層批評）と作家主義から着想を得て、いずれも「地域研究的」という形容句をつけ、両者を組み合わせる必要性を提起されている。ここで山本氏の言われる「地域研究的」の意味を私なりに理解すれば、制作者（や現地の観客）にとつては自明な、あるいは意識されていない地域性、風景を把握したうえでの表層主義と作家主義の融合ということであろう。言い換えれば、地域の文脈で映画と制作者を理解すると同時に、映画を通して地域を理解する、ということになるのか。そのとき、山本氏がとくに注意を喚起されているのは、地域研究者の地域理解と映し出された映像の間のズレ（食い違い）で、そこに「地域社会の課題やそれへの人々の対応」を見いだして、「時代と世界」を読み解こうとされている（一六頁）。

たしかに、本特集第Ⅱ部「混成のうねり——東南アジア映画の新たな冒険」で紹介された国・地域と諸作品においては、ジェンダーやセクシャリティー、家族制度、ナショナリティーといった規範とそれからの逸脱が通奏低音と

なっており、こうした山本氏が提起される方法の有効性を確認することができる。ただし、社会規範との葛藤への注目は、地域研究の素材として作家性の強い作品が偏重されることにつながりはしないであろうか。とりわけ制作本数が多く、映画が大衆娯楽であり続けている国や地域の場合には、そうした作家性の強い作品から読み取れるメッセージは、ある程度相対化する必要があるように思われる。それは、読者の存在ぬきに小説が語れないのと同様、映画の場合も、だれが見て愉しむのか、つまり観客がだれであり、観客にどう受けとめられるのか、あるいは場合によっては制作者の意図とは別に観客によつて構築される意味という点をぬきには、映画を素材として地域を理解するという目的を十分に果たすことはできないし、ここに地域研究の素材として映画を利用する難しさの一つがあるように思われるからである。この点は、やや視点が異なるが、四方田彦氏が指摘されている「国民的ローカル映画」にも関係しているかも知れない。四方田氏のいう国民的ローカル映画とは、決まりきった筋立てをもち、主人公たちが「その社会が道徳的・宗教的に携えている価値観を、すぐれて体現している」（四方田二〇〇三・一四―一五）作品であるが、既存の価値観にどっぷり浸かっているがゆえに、観客の心性という点では優れた素材になりうるであろう。

Ⅲ 地域研究者の役割

「総特集にあたって」に続く「座談会 混迷化する世界、複層化する映像表現」では、後述するアジア映画の混成性に加えて、映画批評や映画制作における地域研究者の役割についての発言が興味深かった。ここではフィクションとリアリティーをめぐる問題を考えてみたい。

映画は教材として教室でよく利用されている。私自身も、勤務する大学の授業でブラジルの劇映画やドキュメンタリー映画を見せたり、劇映画を中心とした映像を用いて現代史を考える教養科目のコーディネータを務めたりしてきた。映画はなじみの薄い地域への関心を惹くのにきわめて有効な素材であるとともに、ある特定の国なり地域なりを考えるには、必読とされる文学作品と同様、必見と思われる映画があると考えているからである。言うまでもなく、ドキュメンタリーであってもファインダーによって切り取られ、制作者によって編集された「作品」であるし、劇映画であっても現実社会を凝縮し可視化しているものもある。したがって、「映画を通じて地域社会を知る」というのは、簡単に見えてなかなか厄介な問題をはらんでいるのであって、映画は地域を「考える」素材と捉えるべき

ものである。

その意味で、「座談会」の中で、石坂健治氏が「裏目読み」や「深読み」の必要性を指摘されている（三七頁）にはおおいに共感できるし、山本氏の「映画を通じて地域社会を知ろうとするのではなく、映画と地域社会をそれぞれ理解した上で、両者を比べることで作品と地域社会についての理解を深める」（二三頁）という方法は妥当であろう。そのとき、「照らし合わせる」（山本氏の表現、三七頁）べきものは、単に「フィクションとしての映画」と「現実社会」だけでなく、「フィクションとして凝縮し可視化された現実社会」と地域研究者自身が理解する「現実」でもあろう。Iで紹介した三本のブラジル映画で見た、時代遅れの旅芸人一座の巡業の旅を通して可視化された、近代化のなかで変わりゆく北東部とアマゾンの農村の姿（『バイバイ・ブラジル』）、ストライキ参加をめぐるサンパウロ大都市圏の労働者の連帯と家族の絆の葛藤に凝縮された、一九七〇年代末の民主化運動の苦悩（『ブラック・タイ』）、感化院で虐待され、叛乱を起こして脱走し社会の暗闇を突き進む、救いようのない青少年群像に体现された貧困と格差（『ピショット』）は、それ自体はフィクションであるが、今日まで何らかのかたちで、私がブラジル社会について考える際の参照枠となっている*。

Ⅳ 混成と混淆

ブラジルやラテンアメリカが語られるとき、人と文化の「混淆性」が常に話題にのぼる。日本でもグローバル化が注目され始めたここ二、三〇年来、自民族中心主義や人種・民族の「純粹性」に対抗する言説として、「混淆性」を賞賛する傾向が見られるが、ブラジルやラテンアメリカの多くの国々においては、独立後、人種・民族の多様性が同質的な国民形成の障害として問題視され、その解決策として混淆がもてはやされた歴史を持つ。つまり、混淆性は国民統合の論理として国家によって回収されてしまい、ナショナリティーそのものへ転換されたのである。それゆえ、グローバル化時代の到来とともに待望されるようになったのは、混淆性の言説を突き崩す多文化主義の言説であった（鈴木一九九九）。

ブラジルやラテンアメリカの経験を知る者にとって、意識的にか否かは別にして、本特集の中で「混成性」や「混淆性」が取り上げられるときにこれらの地域への安易な言及がないのは意外であり、かつ賢明であると感じた。ブラジルやラテンアメリカの経験が示しているように、「混成」や「混淆」をめぐる問題を考える際には、それがどの

ような権力の磁場で起きるのか（植民地支配、奴隷制など）を見逃すわけにはいかないが、本特集やアジア映画交流史を切り開いてこられた四方田犬彦氏や松岡環の著作（四方田一九九三・二〇〇三・松岡一九九七）などを見ると、そうした権力の磁場の中の移民や映画人たちのたくましい生活力と行動力に目を見張らされる。本特集の中で紹介されている膨大な映画からは、第Ⅲ部の標題が示唆しているように、国家という枠組みの「揺らぎ」と新しい地域概念の生成の足音が聞こえて来るようだ。

おわりに

長い間、外国映画に付される国籍を不思議に思っていた。国策映画ならまだしも、商業映画がなぜ国籍を持つのか、という素朴な疑問である。映画に国籍を表示する習慣は今も続いているが、このごろはいくつのも国名が併記され、逆に無国籍化しているのは面白い。資本の面から映画制作が多国籍化したのは最近であるとしても、映画というメディア自体は人や技術の交流、既存の外国作品の参照やリメイクなど、初めから国境を跨ぎながら発展してきた。そうした映画が本来的に有する越境性は、地域研究の枠組みとしての地域概念に再考を迫っている。本特集からは、

地域研究と映画の協働の豊かな可能性が伝わってくる。

●注

*1 ブラジル北東部農村（セルタン）や大都市のスラム（ファヴェーラ）は、ブラジル映画で繰り返し取り上げられる「定番」のテーマとなっている。常に先行する作品が参照され、時代ごとのイメージが構築されていく。地域研究者は、こうして構築されてきた社会像を抱いて、現地に赴くことになる。ブラジル映画における北東部農村とスラムについては、ナジブ（二〇〇六）第四部を参照せよ。

*2 これに関連して、一九八〇年代半ばにアフロ・ブラジル宗教カンドンブレの指導者の中からカトリックとの異種混雑性を否定し、「アフリカ性」を強調する主張が登場した（Campos 2003: 44-48）。また、カンドンブレの指導者が黒人運動に加わる一方、黒人運動の側でもカンドンブレを「アフリカ系ブラジル人」のアイデンティティーの拠り所と捉える、アフロ・ブラジル宗教の「政治化」とも呼べる傾向が生まれた。

●参考文献

鈴木茂（一九九九）「語りはじめた『人種』——ラテンアメリカ社会と人種概念」清水透編『ラテンアメリカ』（南）から見た世界5、大月書店、三九—七二頁。

ナジブ、ルシア（二〇〇六）『ニュー・ブラジリアン・シネマ——知られざるブラジル映画の全貌』鈴木茂監訳、プティグーラ・パブリッシング。

松岡環（一九九七）『アジア・映画の都 香港・インド・ムービーロード』めこん。

四方田犬彦（一九九三）『電影風雲』白水社。

四方田犬彦（二〇〇三）『アジア映画の大衆的想像力』青土社。

Campos, Vera Felicidade de Almeida (2003), *Meu Stella de Oxossi: Perfil de uma liderança religiosa*. Rio de Janeiro: Jorge Zahar.

●映画リスト

『バイバイ・ブラジル』(Bye Bye Brasil)、カルロス・ディエス、一九七九年、ポルトガル語、日本語字幕付きVHS発売。
『ブラック・タイ』(Bless Não Usam Black-Tie)、レオン・イルズマン、一九八一年、ポルトガル語、ブラジル映画祭（一九八六年）で上映。

『ピョット』(Pixote)、エクトール・バベンコ、一九八〇年、ポルトガル語、一九八八年劇場公開、日本語字幕付きVHS発売。

●著者紹介●

①氏名……鈴木茂(すずき・しげる)。

②所属・職名……東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授。

③生年・出身地……一九五六年、三重県。

④専門分野・地域……歴史学、ブラジル地域研究。

⑤学歴……東京外国語大学外国語学部ポルトガル・ブラジル語学科、東京外国語大学大学院地域研究科修士、一橋大学大学院社会学研究科中退。

⑥職歴……東京外国語大学外国語学部助手、講師、助教授を経て、二〇〇一年より現職。

⑦現地滞在経験……ブラジル(一九八一年七月～一九八二年九月、サンパウロ大学大学院研究生、ロータリー財団奨学生、一九八七年四月～一九八九年三月、サンパウロ大学大学院研究生、文部省在外研究と私費による在外研究)。

⑧研究方法……史料・文献調査が中心であるが、一〇年ほど前から始めたブラジルの黒人運動の研究ではインタビューを行ってきた。

⑨所属学会……歴史学研究会、日本ラテンアメリカ学会。

⑩研究上の画期……世界史的な出来事かどうかは分からないが、一九八八年五月のブラジル奴隷制廃止一〇〇周年をブラジルで迎えられたこと。黒人運動の存在と規模を実見でき、ブラジルの人種差別が研究に値することを確信した。

⑪推薦図書……エリック・ウィリアムズ『コンパスからカストロまで——カリブ海域史 一四九二～一九六九』I・II、川北稔訳、岩波現代選書六・七、岩波書店、一九七八年。後に、岩波書店の『モダンクラシックス』シリーズで再刊。